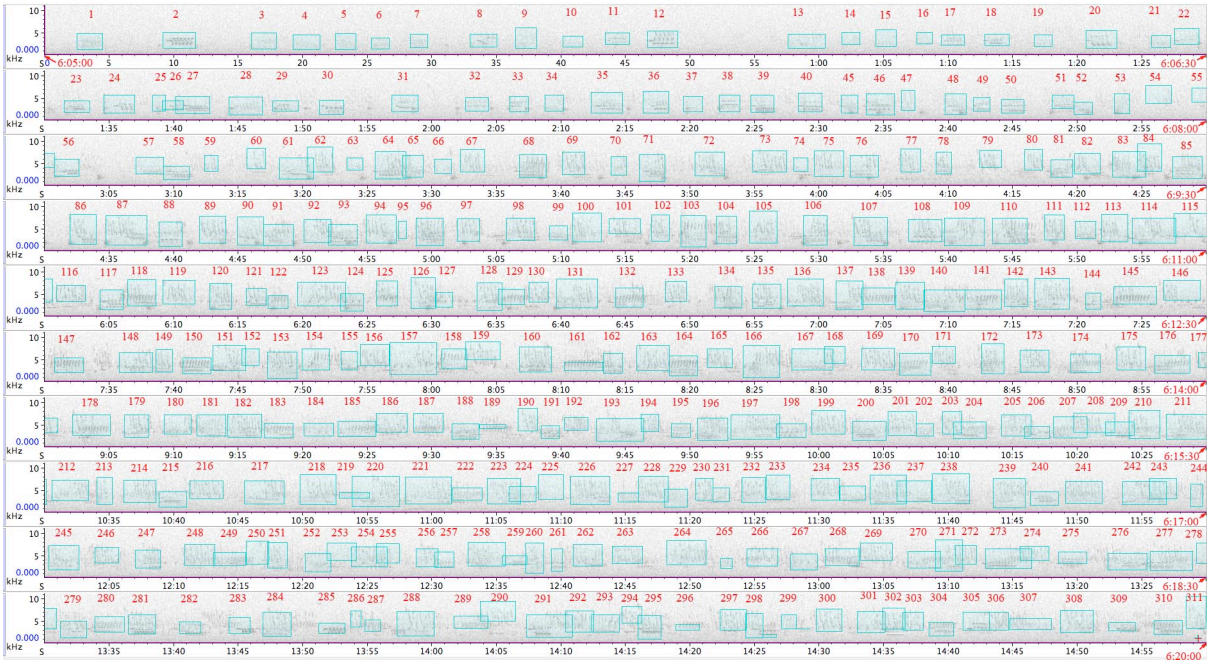
沈黙の春？　さえずりと個体数の減少は対応するか
録音による検証可能性

石田　健　（東京大学）

半世紀ほど生き、四半世紀以上も森の鳥類を観察し続けている者の多くが、さえずりが減った、山の鳥が減ったと言っている。熱帯林の著しい減少により、熱帯林を越冬地とする夏鳥の一部が分布域の一部からいなくなったり、個体数が減ったことはある程度実証されているが、必ずしも夏鳥に限った話ではないように思われる。アフリカから来日した野生生物保護官を日本中部の山に連れて行ったところ、数日滞在して、日本の森は “empty だ” と言った。果たして、このことは事実なのか、あるいはそれを実証する方法はあるか。

本発表では、外来種マングースの分布拡大にともなっていくつかの在来種動物の減少が報告されている奄美大島の森と、隣接してマングースやクマネズミがいない加計呂麻島の森において録音した結果と、ラインセンサスの結果を対比させることにより、個体数の減少とさえずり密度との関係を考察する。奄美大島の実久林道においては、最大時の録音で 15 分間に 300 以上のアカヒゲのさえずりが記録されたが、奄美大島の金作原では、同じ季節の同じ時間帯にまったく記録されないこともあった。録音を使った鳥類や声を出す動物の現在および未来と過去の記録の可能性についても、示唆を示す。

Erithacus komadori　Saneku, Kakeroma 6:05～6:20March23, 2004